巻頭言

手塚信吉
（日本協同体協会常務理事）

鳴呼全人類の敵、残虐殺人青年を出した日本の大人達こそ重大責任がある。御神の前に百拝陳謝するのみ。テルアヴィヴ空港乱射事件の真犯人全部が日本の青年であったと知った時、ハンマーで頭を殴ぐられた思いであった。早速イスラエル大使館に馳せつけて、エイタン大使およびガビッシュ参事官に面会して深く陳謝すると共に、現地情報を承ったのであるが、その時大使は、「今回の乱射事件の犯人が日本の国籍を持つ青年であったことは甚だ遺憾であるが、日イ親善友交の関係を傷つけるような性質の事件とは思っていない。殊にキブツ思想を通して信頼の関係にあるキブツ研修生とは、イスラエル国民は明確に区別して考えているから、安心して、今後一層両国友交親善のために尽力して下さい。」と、固い握手をかわされたのであった。

さてイスラエルと云えばキブツ、キブツと云えば日本協同体協会、それは可成り広く知られているので、事件発生以来、各新聞社やキブツ関係者、それに現在イスラエル滞在中の百余名のキブツ研修生の家族から、真相の問合わせや安否を気遣う電話が頻りであり、わざわざ遠路来訪される父兄もあって、協会員一同忙殺する数日であった。

こんな恐るべき乱射事件の真犯人を出した日本が、世界中からどんな非難や批判を受けても、深く陳謝し恥入るばかりであるが、日本人の大人の世代から、日本協同体協会が多数の青年をイスラエルなどに送るからこんな不祥事件も起るのだ、と云う声を耳にしたことは心外であった。

斯様な矛盾した誹謗は、日本のためにも、キブツ研修生の為にも改めて貰いたい。中東紛争は永い複雑な歴史的、宗教的、民族的な因果関係から生じており、第三者から一方的な批判は謹むべきであり、また大国間の思惑を無視した生兵法の平和論も当らない。ただ明確なことは、現に日本はイスラエルともアラブ諸国とも友交関係にあるから、通商貿易も、文化交流も大いに結構であろう。

日本の青年男女がイスラエルに発達した理想の社会キブツに興味を持って、その実習研究に専念していることは、純然たる文化交流の範囲であって、政治性は全く無い。そしてキブツ思想やその協同体社会が、新時代の新生活原理として魅力的であり、時代感覚に鋭敏な青年たちの心魂を打つものがあるからである。

今の日本の大人達は矛盾だらけ不合理だらけの旧社会秩序にしがみ付いて、出世や金儲けを人生そのものと感違いして、対立闘争に明け暮れて、己れ一人良かれとする不平等社会秩序を警察力で維持している。大学騒動も赤軍騒ぎも、殺人青年の輸出も、その禍因を追求して行くと責任は大人たちにある。奪い合いの経済、嘘の多い政治、そんなものは青年男女からとっくの昔に見捨てられている。

純心な青年男女がキブツを憧れるのは嘘の無い社会だからである。人間が良心だけで活きられるキブツ、警察不要の人間社会、そこに日本の良家の青年男女が、生れて始めての体験であろう農業労働に、朝も五時起きして嬉々として働く姿は、その両親にみて貰いたいぐらいである。人間が物欲を離れて良心を百%活かして働く時、最上の幸福を感得するであろう。利潤追求を生産活動の原動力とする資本主義経済も一大修正を必要とする時が目前にある。キブツに憧れを持つ日本青年の意義を正しく理解して貰いたい。

■ロッド空港での恐るべき事件に関して、さっそく丁重な電報を送って下さり、ありがとうございました。このような危機の時にお互いの人間的な連帯感を確保することは、よいことだと思います。あの恐ろしい殺人者たちと日本人一般を結びつけるようなことは、我々イスラエル人は誰もしないでしょう。もし我々のこの世界がもっと具体的で建設的な目標を示すことができるなら、彼らもこのような行動に走らずにすんだかも知れません。 ——アキバ・エゲル

■……送ってもらった新聞をみて、また怒りがこみあげてきました。彼らの行動は、人間として許せない！ 同じ日本人として私は連帯責任を感じ、恥かしい気持で一杯です。私のイマ・アバ（里親）などは「責任なんて感じる必要はない。あくまで個人の問題だ。」なんて言ってくれましたが…。彼らはクレージーだといえばそれまでだけれど、なぜあのような行動にいたったのか……。私たちみんな考えなければならないと思います。日本の人が心配しているようには、対日感情が悪くなったとは思えません。（もちろんキブツ内でのことしかいえませんが）私の接している人たちは、かえって気をつかってくれ、とってもうれしく思いました。 ——橋本和

■……マスキール（キブツの村長格の人）が僕と一郎君が話しているところへ来て、「今度の事件と、ここにいる君たちとは何の関係もない。日本人だけでなく、どこの国にもこういう狂人はいるんだから。」となぐさめてくれました。だいぶ気をつかっていてくれる感じですが、ラジオではニュースのたびに、日本人、日本人という言葉が使われるので、反射的に「日本人は何ということをするんだ！」と感じる人もかなりあると思う。いまはじめて味わういやな同族意識です。 ——奥村久雄

＝キブツ便り＝
関係ないのか？
—空港事件にふれて—

■……その日の昼にキブツ側から、「あなた方は、この事件に無関係なことを理解している。みんなが『日本人云々』というだろうが、心配しないで元気にやっていって欲しい。」とのメッセージがあり、これは新聞にも載りました。我々を知っている人はやさしくしてくれます。……こんな感じでしたから、日本からの新聞を読み、かえって驚きました。「表も歩けない」という表現の中に、日本人特有のとりつくろい、それでいて何ら根本的解決をさぐらない姿勢がみえて、いやでした。 ——大巻正夫

■研修生の家族に対しては、事件によってキブツの人達の態度が変わったりいづらくなったりすることは全くないと知らせて下さい。個人的にも、家には手紙を書くようにといってあります。何といっても、事件を聞いたショックは大きく、そこへ言葉がわからないときていますから、「仕事場でも小さくなっているんだ。」といっている人はいます。 ——奥村久雄

— 制作部座談会 —— 6月4日・1972年 ——

テロと非暴力をめぐって・・・・

(1) 空港事件の波紋

X　5月30日のイスラエル、テルアヴィヴ空港での事件について、キブツに研修生を送り、イスラエルと深い関係を持つこの協会にいるぼくらにとって、この事件の何が重大なことであるか。そして、こうした問いかけがなされた以上、どうやって答えてゆくのか考えてみたいと思うが……。

Z　日本人全体にとってショッキングなことだったことはたしかだ。ただ、ぼく個人に限れば日本人であったということはそれほどの重要性を意識の中に持たない。それよりむしろ、パレスチナ問題一般と、PFLPや赤軍のいっている世界同時解放闘争の目的と手段というところにきてしまう。つまり、直接闘争に関係ない大勢の人々が殺された事実に問題をみる。暴力がああした形で行使されることをどう評価すべきかということにもなる。

X　かれらがたまたま日本人であったということは関心を持つきっかけになっている。しかし、その事件の処理にあたって政府がドラ息子が何かしでかしたときの親のように謝罪したり、賠償したり、再びおこさせないという名目で大学管理、出入国管理、政治活動シンパの調査など、実におせっかいだ。国家というレベルでなしに言って、ある意味でかれらは実は、今のぼくらのやっていることと非常に近いところにいるという気もしている。単に気狂いというのでなく、かれらがあそこまで行ってしまったことは、同感はとてもできないが理解はできる。だから痛切に感じる。

もうひとつは、解放をめざす運動がああしたところに落ちこんでしまったという不幸を、ぼくらの運動＝生き方の中にどういうふうに組み込んでゆくかが課題だと思う。ぼくはともかく卒直に、あれはまずいことだ、と考える。その上で出発したい。

Y　まず、知らないよその問題にとびこみ、見ず知らずの人間を、多分敵意というバネもなしにあれだけのことができる日本人があらわれたか、という驚きはあるね。

(2) 無差別テロの周辺

Z　この事件によってぼくらの立たされているのは、あくまでも受身の立場だ。いろいろな側面からの検討が要求される。ある一点から、たとえば殺人はいけない、という論点だけからは対応できない問題がでてくる。なぜかれらはあんな過激な、残虐な行動をとらなければならなかったかということが新聞などで語られているが、これだけではアラブ側にとっては不満だと思う。パレスチナ入植以来、今日までにイスラエルはいったい何をしてきたか、ということも問題になって当然だと思う。

今度のことに限っていえば、さっきいったように、最も大きな問題は、PFLPが日本人を使って女、子供を含めたまったく無関係の人間を殺したことと、そのあとの声明で、ゲリラ側はその行動を英雄的なこととして賞讃し、カイロ放送も同じことをいっていたことだと思う。ぼくの個人的な見解としては、それに対して怒りを表明することが重要だと思えるんだ。

第三者であるからこそできることだろうが、ぼくらは罪のない人々があんな形で殺されたことに対して、当然疑問をもつ。しかし、単にああしたことは正しくないのだ、というだけでとどまらないで、ゲリラ側の論理にも喰い入って納得させることができなければならない。なぜ単に気の毒だという、センチメンタリズムでは相手側の論理に対抗できないかということは、ぼくはアラブ側がこの事件を「デル・ヤシン作戦」と名付けていることから思いついたんだ。デル・ヤシン村は独立戦争当時にイルグンによって全滅させられたという村だ。ああいったことがいくつも起こったらしい。まったく罪のない人間が殺されている。ヨーロッパではたしかにユダヤ人は多く殺されていたが、パレスチナに限ってみた場合、アラブ側が圧倒的に被害をこおむっている。だから、単に今度の事件を責めるだけのヒューマニズムは有効性を持たないと言える。そこでぼくはPFLPの理論をぼくなりに分析把握しておきたいと思う。

『アラブゲリラと世界赤軍』（京大出版局）によって少し説明すると、かれらは四つの敵を想定する。(1)イスラエル国家、(2)世界シオニズム、(3)世界帝国主義、(4)アラブ封建主義、である。それら四つの敵に対して闘争を展開してゆくのであって、単にイスラエルなり、ユダヤ人なりが敵なのではなく、最終的には世界帝国主義の打倒、被抑圧人民の解放が目的となる。そして、パレスチナにはアラブ人とユダヤ人が共存できるような社会をつくっていくことにある。その社会は当然解放された社会であり、資本主義からは訣別した社会であるわけだ。

ここで、たとえ一歩をゆずって、パレスチナゲリラが活動することを認めるとして、はたしてかれらの行動は戦闘員に、また軍事施設に限られるべきではないのか。ところが、今回の攻撃対象が一般人に拡大されたこと、そして、それを肯定するような声明を出していること自体に、すでにかれらのめざす解放されたところの社会から逸脱していることになりはしないか。もし、あのような手段が肯定されるとしたら、すべての非人道的な行為が、ある美名のもとに正当化されてしまうとあやぶむ。

次に、パレスチナゲリラが存在するということ自体の根底にある問題——イスラエル国家がパレスチナにあるということについても詳しく考えてゆかなくてはならないが、基本的にイスラエルの国家は存続すべきだという意識はぼくの中にある。かといってパレスチナ人の要求が無視されるべきではない。イスラエル・パレスチナ連合国は、たとえ実現できるとしてもずっと先のことになる。今現実的にできることとして

は、国連決議にもとづき、国際慣行にのっとって、両者を同じテーブルにつかせるとか、アラブ側はゲリラ活動に道義的規制を加えるとか、そういったことが必要になるのではないか。

(3) 敵対の論理からの解放

X 今の説明によると、すべて敵対の論理で革命なり、解放運動なりが進行してゆく。だから、ぼくらの立場も敵か味方かのカテゴリーにおしこめられる危険がある。ぼくは敵対の論理によって進められるものごとの中にぽっと投げ出されると、いつもなんとかしてこの敵対の論理とずれた面で現実に対応してゆきたいと願うのだが、いつもぼくらの運動の微力さに無念な気持を抱かざるをえない。単なる無色（無力）の中立ということではなく、さっきいった通り、敵対の論理と位相を異にした、非暴力、共存、共生の論理からの、積極的な現実への働きかけとして、共同体運動をとらえたい。憎悪にもとづいた変革と異ったところに、新たな人間同士の共感の関係を創ってゆけたらと思うわけだ。結論的にいえば、このような線に沿っておしすすめてゆく以外に、人間の真の解放などありえないのではないか。

ここで、ガンジーの運動のあり方が参考になると思う。イギリスとの抗争とまったく離れたところで、非暴力運動を展開したのではなく、もっとも直接的な形で、村落を組織し、自己防衛として行使しえた暴力を各人が自己抑制するところから出発した。

Y しかし、あの事件のおこったことは否定することはできない。ぼく個人としては、ああした事件は今度ばかりではないと思う。ただ、ぼくはやるまいと決意だけはしている。しかし、ぼくがやらざるをえなくなることもあるかもしれないし、逆にやられることもあるかもしれない。

ただ、ああいうことをしようというものに、やめろ、といって説くことはぼくはできない。根本的に押しつけがましいと思う。

X 微妙なところだし、誤解されやすいけど、基本的にはそうなんだな。やめろ、やめなければ殺すぞ、というんでは、結局同じレベルにしか立っていないわけだし。だが、これにも限度があって、もしあの場で射ってる奴にタックルできる位置に自分がいたら、そうするのが正しいと思うんだ。

Y 現在の秩序が壊されうるもの、ということを知らせ、不安を抱かせたことは、政治的には有効だったかもしれないが、変革をめざす者が、固有の平衡感覚というか、仁義みたいなものをなくすことは、変革者としての生命の終りだと思う。彼が現実のミニアチュアの行動しかとれないときは、もうその行動からは、現体制の類型物しか期待できないと思う。

あの事件の当事者は、国を持たないパレスチナ人と、国を持つユダヤ人だと思う。日本人は感覚的には局外者だ。ぼくは感情のバランスということを考えるのだが、パレスチナ難民は日々悲惨な状態におかれているという事実がある。その悲惨につり合う行動は、また追放され、徐々に殺されることを待つ行為の中にではなく、抗議し、殺すことも辞さない立場に立つことにある。そうしてはじめてバランスがとれるほどに抑圧が厳しいのかもしれない。そして、あの日本人たちも、多分違う要素から、ああした行動によってのみバランスを回復できるほどに絶望した状態にあったのかもね。

抑圧状況のあることはたしかだ。しかし、

理想的には、この抑圧に対して正当な手段で、正当なというのは合法的ということでなく、民族なり個人なりの精神史にもとづく感覚で対応してほしいし、対応したいということだが……。

(4) 非暴力の実践

X 今のように個々人の立場でいったら、すべてが正当だし、他人のすることは何でも構わないわけだ。だがここにも限界があって、どこかにコミットしなければならない。何もかも許すことはできないな。

この事件のひとつの重さというのは、いままでより深くぼくらをまきこんでしまったことだ。政治はいつも他人をいやおうなしにまきこんでゆくものだね。そのまきこまれた中で何をいうかというと、今ぼくらは、何かすればすぐに暴力で弾圧されるとか、暴力で対応するとかいう、ギリギリの状態の中にいる。すると非暴力なんて、バカみたいに無力に思えるが、結局それでもなお、つらぬこうということになる。でも、いくら非暴力なんぞといっても、コンチクショウ、と思うときはあるわけだな。

Z そこにゆくと、ガンジーは一言でいって偉大だね。デモの先頭に立って歩き、イギリス人警官になぐり倒されて血を流し、起き、また倒され起き上がる。それでも指一本あげずつづけてゆく。しかも自分がやらなかったばかりでなく、他人にもやらせなかったというんだから。ぼくらは卒直にそこまで行ってないことを認めよう。普段はともかく、いつも暴力に転化する危険を持っているわけで、今度のことは教訓だと思うよ。

X こんな話は本当に煮つめていくと宗教的みたいにならざるをえないところがあるね。ところが、現実にはそれがなかなか力になりえないというジレンマがある。

(5) 研修生派遣

Y 今度の事件によって、かなり面倒な問題が提起されている。第一にゲリラに、ひょっとしたら日本人であるが故に殺されることもあろうし、事故のまきぞえを喰うこともあるかもしれない。それほどまでにして、キブツに派遣する必然性はどのくらいあるのだろう。

Z キブツ社会の構造面から、日本の社会への示唆があると思う。一挙に今の社会をくつがえして、同じパターンの権力国家を作っても、ソ連が良い例だが、ぼくらには多分、暮らしやすくはならないと思う。もっとも中央集権の害の少ない社会は、ヴィジブル（可視的）な集団の連合だと思う。単に分散しているだけでなく、国家とは別なレベルで経済的、政治的、文化的に連合してゆけるような内発的地域社会をもっているのは、今のところキブツ連合しかない。その点から、半年なり、一年なり、キブツに行って体験をしてくるのは、社会変革・自己変革を模索するものには役立つと思う。

Y しかし、キブツで働くことは、具体的にイスラエルにコミットすることになる。たとえ、パレスチナ人の解放のために祈っても、少なくとも現在のパレスチナゲリラにとっての敵になる。だから、キブツで働くものは、そのへんを理解してから行ってもらいたいが……。

X 結局ぼくらの立場としては、あらゆる人を否定せず、相手は変わるかもしれない、変わらないかもしれないが、とにかく、相手を抹殺せずに新らしい共存関係をつくってゆくように努力するということだね。